

明神もと子 著

どんなに障害が重くとも—1960年代・島田療育園の挑戦

橋本圭司（国立成育医療研究センター）

重症心身障害児施設島田療育園（現島田療育センター）の初代園長小林提樹先生は、13年間、重症児の療育に当たり、重い障害をもつ子供たちの医療と福祉の道を切り開いた。この本は、著者である明神もと子氏が、児童指導員として同施設で勤務した際に経験したさまざまなエピソードが綴られている。

小林は、障害があるので容易ではないが、愛情を持って何らかの取り組みをすれば、伸びるし、伸ばさなければならないと考えていました。また、発達検査の網の目にはかからないが、あやされて声を出して笑う、音楽に合わせて手を振る、のように観察で捉えられる行動を小林は「下への発達」あるいは「根の発達」と表しています。そして、「快感情を捕まえて指導する。知的発育が低いからしかたがないと放っておいてはいけない」といって、顕微鏡的な微細な観察ときめこまやかなとりくみを求めたのでした。（本文より）

日ごろより障害児のリハビリテーション診療にかかわっている私にとっては、何とも心を打たれる文章である。近年、小児リハビリテーションや重症心身障害児医療にかかわる専門家が、果たして彼のような探究心をもち、きめ細やかな関わりをしているだろうか。少し気恥ずかしくなってしまった。今の私は、障害の重症度や改善の目安を数値化したり、ゴールを設定したりすることばかりに捕らわれすぎてはいないだろうか。

小林は重症児の医療を「第5医学」と考えていた。第1医学は保健医学、第2医学は予防医学、第3医学は治療医学、第4医学はリハビリテーション医学であり、重症児医療はこの4つでは覆いきれない、はみだすものであるということです。第5医学とは大往生であり、医学的に、解剖学的にも加害者となるべき死因が発見されないものがあることが証明されるような天然死を迎える技術、それが第5医学のもっとも大きな目標であるということです。（本文より）

小林の考える重症児医療は、日々ただひたすら児に愛を注ぎ、そしてある日突然訪れる別れの日に向けての生命観であり、命の尊重、そして幸福の実現という積極的な療育観そのものである。

「この子たちは不運であったが、不幸ではない。幸福な、あるいは不幸でない生涯を送らせてあげたい」

今日、障害児教育や障害児リハビリテーションは効率を要求されて、訓練至上主義と成果主義になっていないだろうか。専門性が分化した結果として、人として向き合う姿勢や、愛を注ぎ、相手の幸福を願う心を忘れてはいないだろうか。本書は、われわれが忙しい日々忘れてしまっているリハビリテーションの原点を、思い出させてくれる。

（四六判、頁264 2015年 定価1,800円＋税[ISBN978-4-272-36083-3] 大月書店刊）